

# 節祭の衣装考

伊 波 悅 子

## はじめに

琉球弧の24度線上に点在する竹富町の島々の中でひときわ大きい島である。秘境と言われるほどの原始林、太古の歴史をまだ引きずっているかの如く、20世紀最大の発見と言われたイリオモテヤマネコの出現は、その歴史の古さを証明しているようである。そんな未知の島に調査に入るのはおこがましい気がした。出発まえに沖縄県教育庁の調査した西表島の染織品を調べると8点あることがわかった。

116	木綿花色地松竹梅波文様紅型踊衣装	古見	大正末
118	木綿花色地松竹梅鶴亀流水文様紅型踊衣装	古見	大正末
119	苧麻白地トラ絵手描き旗	干立	明治（写真19）
120	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	古見	大正末
121	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	干立	昭和初
122	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	干立	大正末
353	芭蕉紺地平織衣装 チョウジャンギヌ	古見	
354	芭蕉紺地平織踊衣装 シズカキ	古見	

調査テーマを見つけるため大原に船を降りた。そして西表北岸一周道路沿いの村々を立ち寄ってみた。その中から祖内・干立には年中行事として「節」<sup>シツイ</sup>が執り行われ、平成3年、「国の重要無形民俗文化財」に指定された事に注目した。

## 1 竹富町西表の概要

西表島の古い記録は15世紀後半に書かれた『李朝実録』の中の朝鮮人漂流記である。そしてその後の近世にいたるまでの間は伝説の時代である。シマ建ては祖内が古くそこに二人の英雄がいた。一人は大竹祖内堂儀佐（写真1）であり、もう一人は慶来慶田城用緒（写真2）である。この二人の人物については『琉球国由来記』『慶来慶田城由来記』にててくる。1500年八重山支配をめざす中山王府にたいし、英雄オヤケアカハチを先頭に抵抗を試みるが敗れ、西表首里大屋子、吉見首里大屋子が任命され、王府の支配下に組み込まれた。その後首里王府時代の1636年薩摩から「宗門改め」命ぜられひとりのこらず把握され、そしてこの人口調査にもとづいて翌1637年人頭税施行される。また人口増

加が伴って崎山村、上原村ができ、寄百姓という形の強制移住が行われ、百姓の生活はきびしくなっていくのである。それ以降マラリアが猛威をふるい多くの悲劇をうみ村々は廢村へと追いやられた。また石炭を産する県内唯一の島として1885（明治18年）より始まる〈西表炭坑〉の哀史は今なお人々の記憶にとどめられている。

## 2 祖内・干立の神行事「節祭」

節替わりに行われる祭り。収穫の感謝と来る年の豊作を祈願する南島の正月儀礼である。『琉球国由来記』卷21に次の記録がある。〈七八月中ニ己亥日節の事由來、年帰シテ家中掃除、家藏辻迄改メ縚道具至迄洗拵、皆々年綱ヲ引キ三日間遊び申也〉。1700年代初期の記録である。旧暦7、8月中の己亥の日におこない、年帰し、年の折目として家の内外を洗い清め、年綱を張って3日間遊ぶ、とある。近年は8、9月の己亥の日を選んでいる。生活様式の変化によりシツイ儀礼は殆どの村で姿を消した。この様な中で今なお大きく年中行事に位置づけされている所は西表祖内・干立（星立）と石垣島の川平である。祖内・干立両字では3日間行われ、1日目は年の夜で家屋内外の清掃をし、テリハカニクサなどを柱や家財道具に巻き付ける（写真3）。また海から砂利を探るってきて家の内から外へと播いて祓いをする。そして新年を迎える準備をする。2日目は正日といい、未明に若水を汲み、定められた浜へ集い、旗頭を立て（写真4）、船漕ぎ、棒技、獅子舞、ミリク（弥勒神）の行列、アンガーダンゴ（節アンガマ）などをして過ごす。3日目は村の井戸へ感謝の儀礼と諸芸能のやり納め〈止済ミ〉の日である。

## 3 節アンガマ

祖内・干立（星立）に伝わる芸能の一つで、豊穣を招来する世乞い踊りの集団である。祖内では、前泊浜で二重の円陣を組んで〈今日ヌフクラシヤ〉〈五尺手巾〉〈ググハ〉〈船〉の4曲を歌い踊る。内円陣は黒朝（注1）の被衣をかぶったフダティミ2人と太鼓を打ちながら歌う音取り2人で構成され右回りをする。外円陣はスディナ（注2）、カカン（注3）の衣装に青布で鉢巻きをした女性アンガーたちからなり、歌に合わせて所作を行なながら左へ廻る。星立村では御嶽の境内で行いトウチと呼ぶ男女2人から成る内円陣が、外円陣をリードする。

## 4 祭りの衣

①ミリク（弥勒神）の衣装（写真5、6、7、8、） 採寸は（調査カード1）

ミリクおこしは、公民館におかれたミリクの面を49歳の生まれ年の男性が着装することにより、いわゆるミリク神に変身する。その世話役の古老が一人いる。いった

ん変身すると食事も用をたすこともできない。「ミリク節」の演奏の中、左右から袖持ちに添われながら、左手に杖右手でうちわを振り行列は進んで行く。黄色の着物、白衣の長襦袢、黒の丸帯、白手袋、白足袋、うちわ、杖をもつ。

(写真7、8)は平成6年以前に着ていた古いもので祖内公民館に保管されている。和装仕立てで寸法を見るとややゆったり縫われている。単衣で肩当てと居敷き当てがある。袖は二重になっている。それは扇を持って踊る時袖口が目につくので二枚仕立てになっているのだろう。

### ★現在のミリク衣装について

*制作年代	平成6年
*予算	文化庁補助事業にて製作
*補助金	40万円
*制作者	紅露工房：石垣昭子
*原材料	絹
*原材料生産調達	紅露工房にて養蚕から絲つくりまでしたものを使用(写真9)
*染料	クチナシ

②タナシ（藍型衣装）船頭の衣装について（写真10、11、12）採寸は（調査カード2）船頭は一番旗と共に出発し、前泊ウガンで司から力酒を受ける。そして舟子と一緒に「ヤフヌ手」の武芸を披露する。

衣装はタナシ（注4）（藍型の着物）、白襦袢、股引、白黒縞脚絆、兵子帯、タスキ、入道頭巾、ハチマキ、六尺棒を持つ、タナシを尻まくり

タナシは松竹梅鶴亀流水文様藍型である。文様の部分には墨で隈取りがなされている。寸法をみると琉装の普通サイズである。古いのはざっくり織られている。

### ★タナシ（藍型衣装）について

*製作年代	昭和63年～平成6年
*予算	毎年生まれ年に当たる皆さん方の寄贈により製作1着20～40万円
*原材料	苧麻：地元調達
*布製作	紅露工房：石垣昭子
*型染め	金城盛弘（金城紅型工房／小禄在住）

③婦人アンガマ：フダチミ衣装について（写真13）

白カカン、麻タナシ、クバ笠に黒朝をかぶり、扇を持つ

古いクルチヨーは公民館に保管してある。（写真15、16）採寸は（調査カード3）

琉装で仕立てられ布巾いっぱい使われている。それはすっぽり被るためであろう。襟もいっぱい使い耳もそのままである。そしてトンボの羽のように透けるほどうすく織

られているのである。

★フダチミ衣装について

*製作年代	平成 7 年
*予算	文化庁補助事業にて
*補助金	40万円（2着）
*製作者	紅露工房：石垣昭子
*原材料	苧麻：糸の調達は宮古島
*染料	アカメガシワ

## 5 節祭りその他の染織物

★紅型ウチビ（頭巾用ふろしき）（写真17）

*製作年代	平成元年～平成 6 年
*予算	地元寄贈による（4枚製作）
*布製作	紅露工房：石垣昭子
*原材料	苧麻
*紅型染	金城盛弘

★紅型舞台用幕について（写真18）

*製作年代	昭和27年
*製作者	城間栄喜（城間紅型工房）と推定される。

（当時西表祖内で病院を開業していた仲里朝貞氏が在職記念として寄贈したものである仲里氏は首里崎山出身であることなどからの推測である。）

★旗頭用旗（写真4）

*製作年代	平成 3 年
*予算	文化庁補助事業 705,550円 3旗分新調する
*旗用布製作	紅露工房：石垣昭子
*旗デザイン	石垣金星
*原材料	苧麻：旗の縁部分など一部木綿使用
*旗染めと製作	寿屋

（注1）黒朝 王朝時代の礼装のときの表衣。袍の一つで、三司官以下諸士が着用。黒の朝衣の意で藍袍とも書く。藍で何度も染めたきわめて濃い紺で黒に近い。

（注2）スティナ 八重山で明治後期まで女性の礼装用として用いられた着衣。着丈は

ほぼ身丈の長さ、カカンより少し短めで、脇はあく。正装の軽装としてカカンと着た。

(注3) カカン（下裳） 王府時代の婦女子の下半身用うちぎ。礼装用。上半身用のドゥジンと対をなす。長いスカート形で腰回りに5ミリぐらいの襞を細かくよせ、上部両端に長短2本の腰ひもがついている。右腰で両端を深く違えて前方で結ぶ。

(注4) タナシ 王府時代士族以上の男女の夏の正装用表衣。田無は当て字。上流では美田無という。士の禮装用表衣は夏冬とも式服であるクルチューであるが略装の時は夏は田無を着用する。明治以降、和装に改める男子がふえるにつれて、男子の田無着用は希にしかみられなくなり、そのため田無は女物と思われるようになった。

## おわりに

3カ年の調査期間があり、2回西表島へ渡った。1年目（10年度）は島の様子とテーマ探しで島を訪ねた。手ごたえのあるものであった。南風見田の浜から波照間島が見え、強制移住とマラリアの悲惨な歴史を、忘勿石の碑に学んだ。古見の三離御嶽をくぐり樹高15メートルにもなるサキシマスオウノキの群生を見た。台風のせいか大木が倒れているのが目立ちこの先が思いやられた。石垣金星氏のサバニに乗って内離島を抜け廃村の舟浮や網取に上陸した。ニッパヤシの群生、炭坑あと、旧村内を見てまわる。そして祖内に宿をとり、祖内の節祭が今なお厳かに執り行われていることがわかった。そして2年目に細調査をしようと計画を立てた。

2年目には節祭を実際に見ようと思ったが、その日に講座と重なり不可能となった。その前に調査に行くことにした。祖内に着くと公民館が立派に新築されていた。のぞくと机とテーブルしかなかった。さっそく祭りの衣装を調査したいと公民館長に申しでた。快く引き受けてくれた。しかし公民館建設で道具一切引っ越しをしており、何がどこにいったのか、何がどこに片付けたのかわからないという。一部保管してある衣装を調査した。

それは祭りの中心となるミリクのあでやかな黄色の衣装、船頭の藍型の衣装、フダチミの顔を隠さなければならなかつた伝説の黒朝の衣装である。その祭の衣装に触れるのはもつたいないような莊嚴な気持ちになった。

また、チカ（司）の衣装（写真20）をぜひ調査したいとお願いしたが、祭の時だけしか出さないとのことである。調査するとしたらその前後しかない。それは次回調査することにした。（しかし12年度は調査費がうち切られ不可能になった。）

夜になると公民館では祭りの稽古がはじまった。冷房のきいた部屋ではアンガマ行列の婦人達が太鼓を打ち、紅白のザイをふって踊る。庭では男たちがヤフヌ手（ピヨーン）、すなわち櫂の武芸を特訓している。三線、笛が行列をリードする。子どもたちはまわりで

見ている。時はゆっくり流れ、王府時代から平成の現在まで受け継がれている。

節祭が「国の重要無形民族文化財」に指定されて、衣装、小道具など年々整備されていることが目の当たりにわかった。そして区民一致協力して実施されている事がわかった。

今回の調査にご協力頂いた石垣金星・昭子さん、祖内公民館長をはじめ祖内区民のみなさまに心から感謝いたします。

### 参考資料

- |            |             |
|------------|-------------|
| 沖縄大百科      | 沖縄タイムス社     |
| 神々の古層 9    | 比嘉康男 ニライ社   |
| 南島情趣       | 本山佳川        |
| 八重山文化 3, 5 | 東京・八重山文化研究会 |
| 新琉球史近世編    | 琉球新報社       |
| 沖縄の染織      | 沖縄県教育委員会    |
| 南方文化の研究    | 河村只雄        |

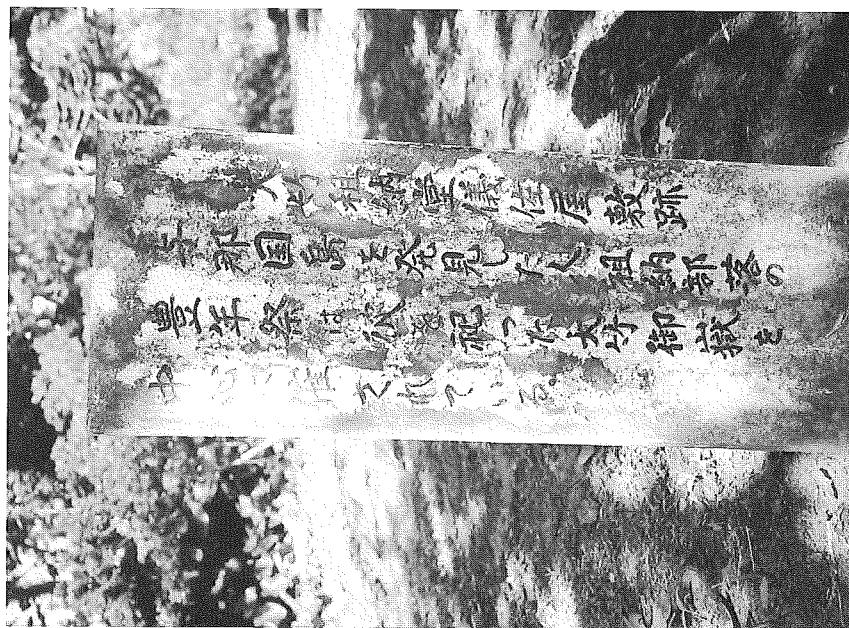


写真 1 大竹祖内堂義佐屋敷跡

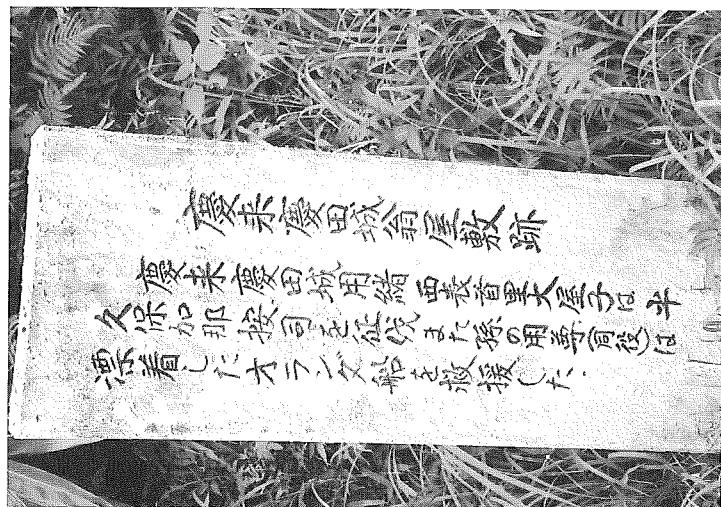


写真 2 慶来慶田城用緒翁屋敷跡



写真 3 テリハカニクサを柱や門に巻く

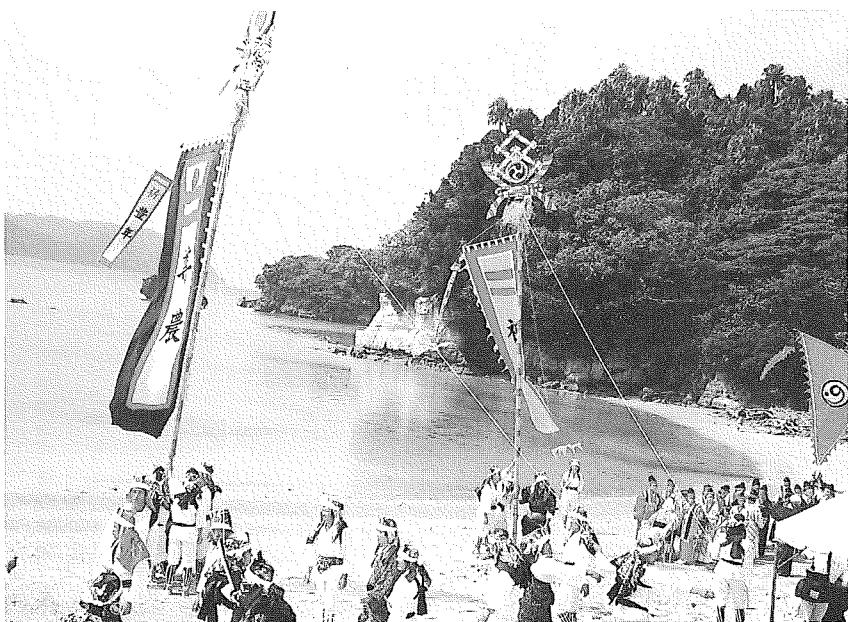


写真 4 祖内の旗頭

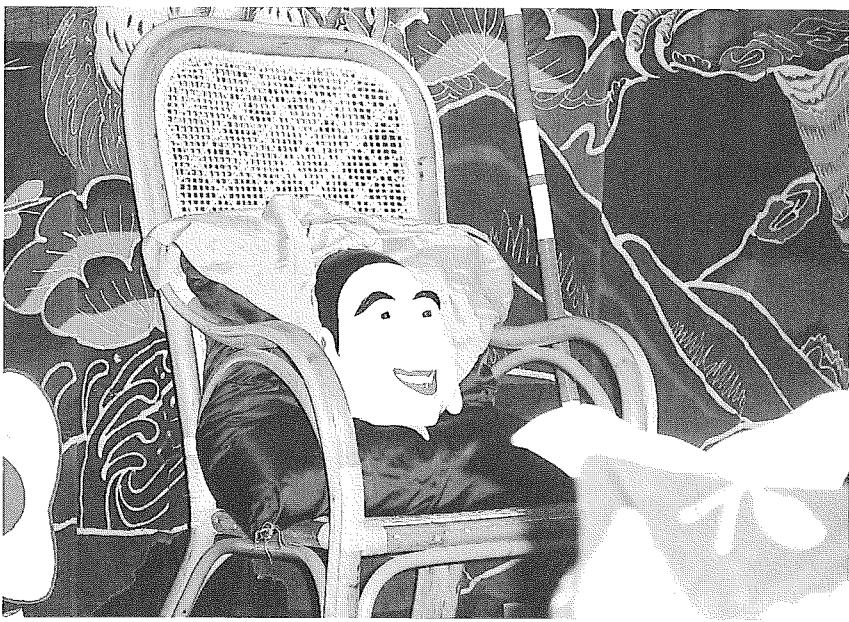


写真 5 ミリクの面

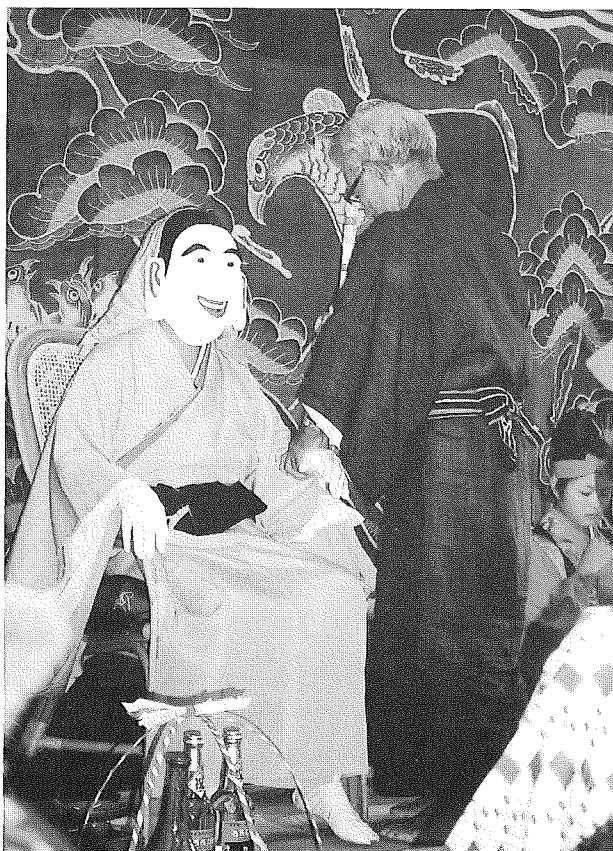


写真 6 ミリク神に変身

写真 7 ミリクの衣装による

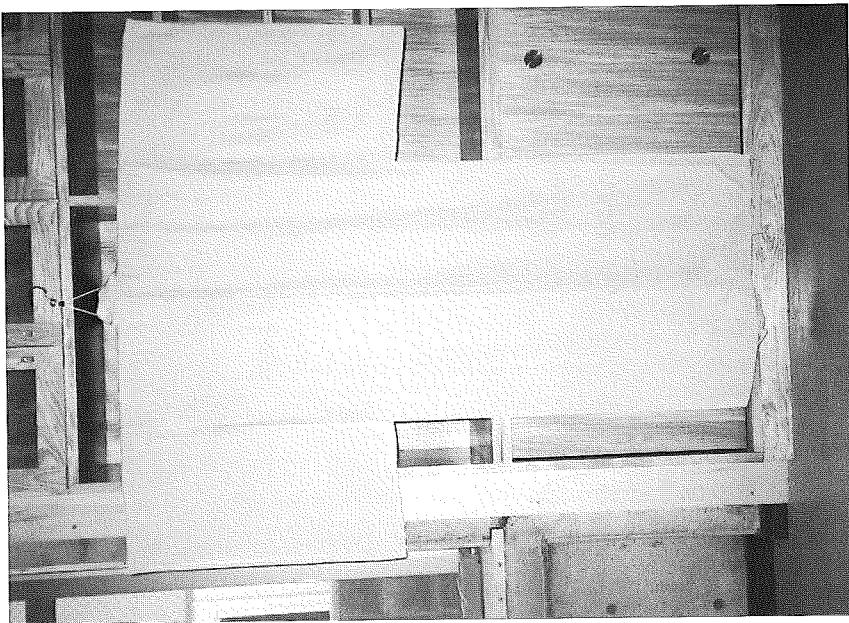


写真 8 ミリクの衣装文化庁補助事業





写真 9 紅露工房にて養蚕のようす



写真 10 タナシの着装（船頭の姿）

写真 11 タナシ

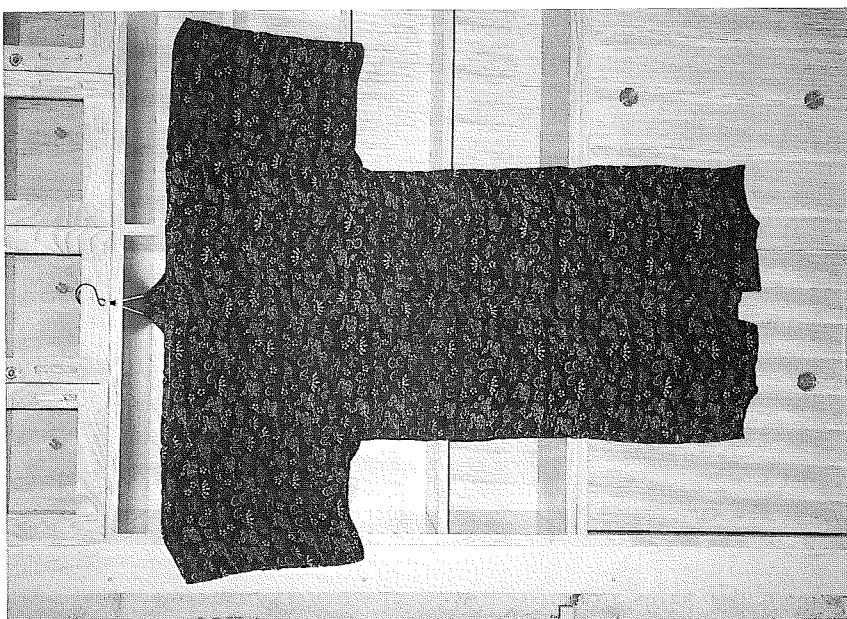


写真 12 タナシの部分

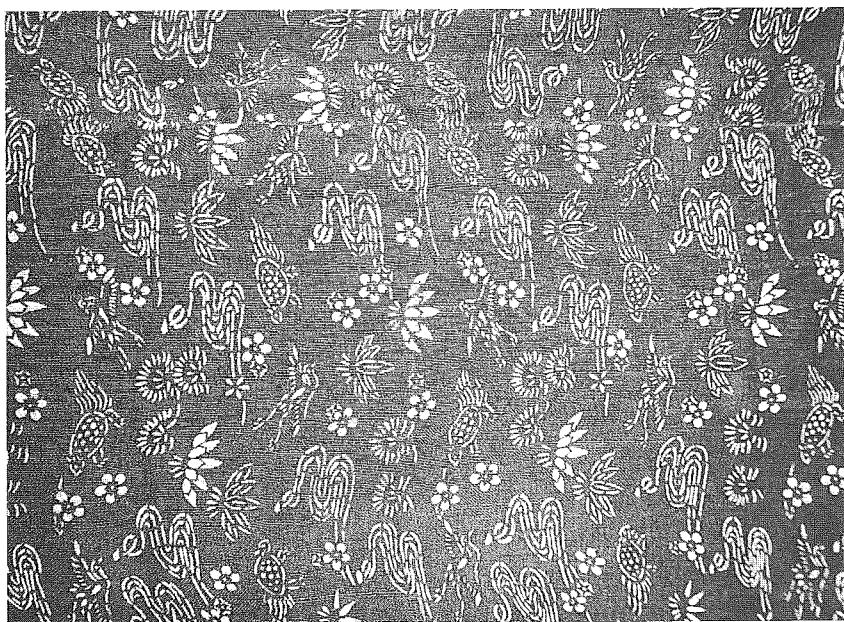




写真 13 フダチミの衣装



写真 14 アンガマの衣装

写真 15 フダチミの衣装

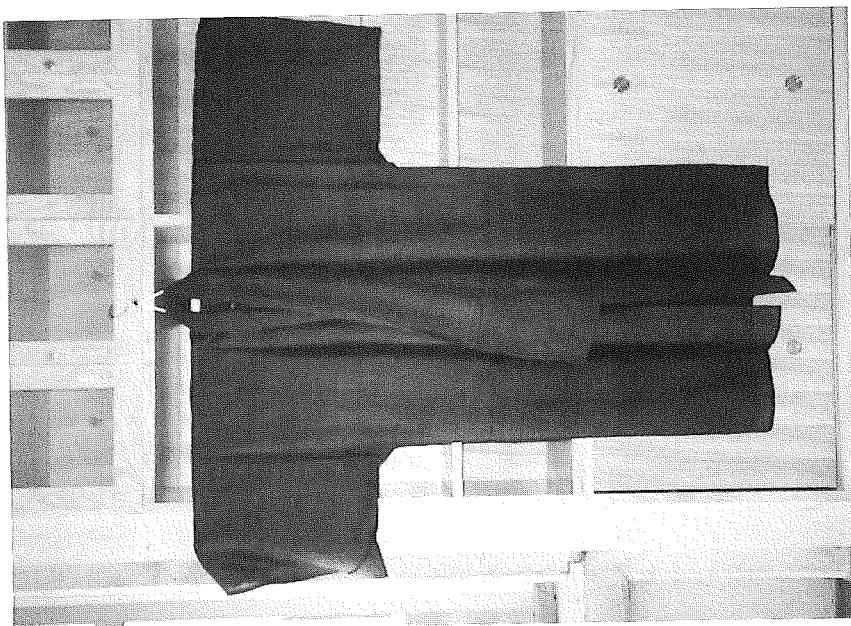


写真 16 フダチミの衣装部分

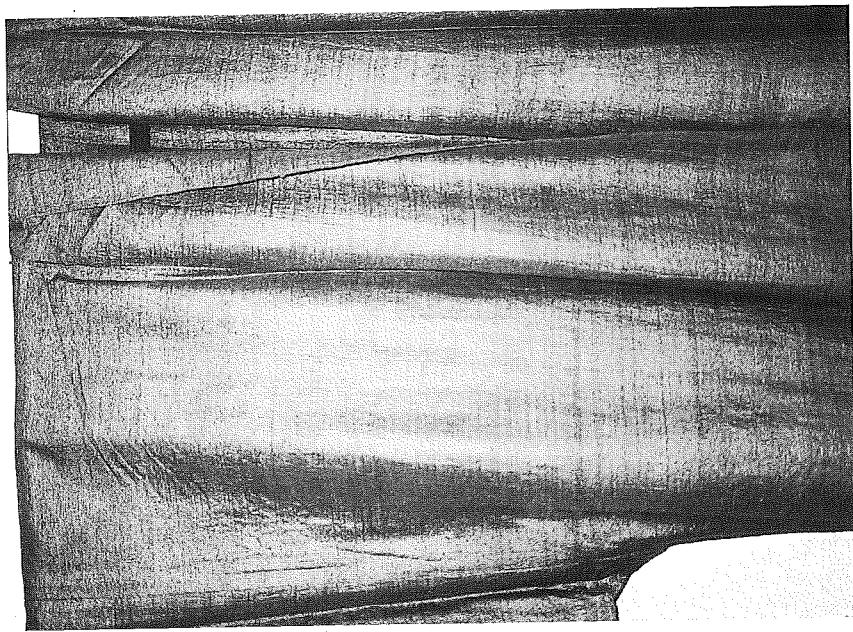




写真 17 紅型ウチビ（星立）



写真 18 紅型舞台用幕

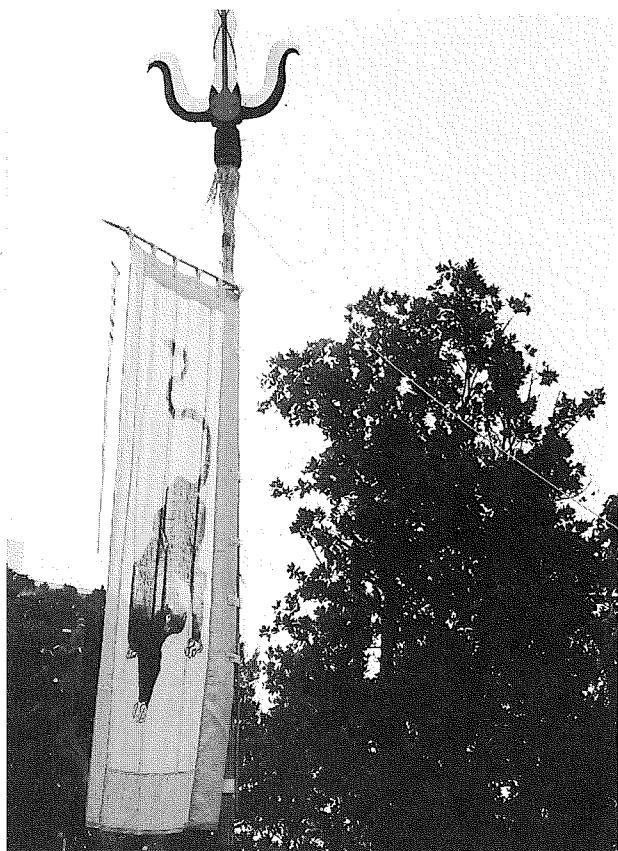


写真 19 莢麻白地トラ絵手描き旗



写真 20 星立のウガン・チカの衣装

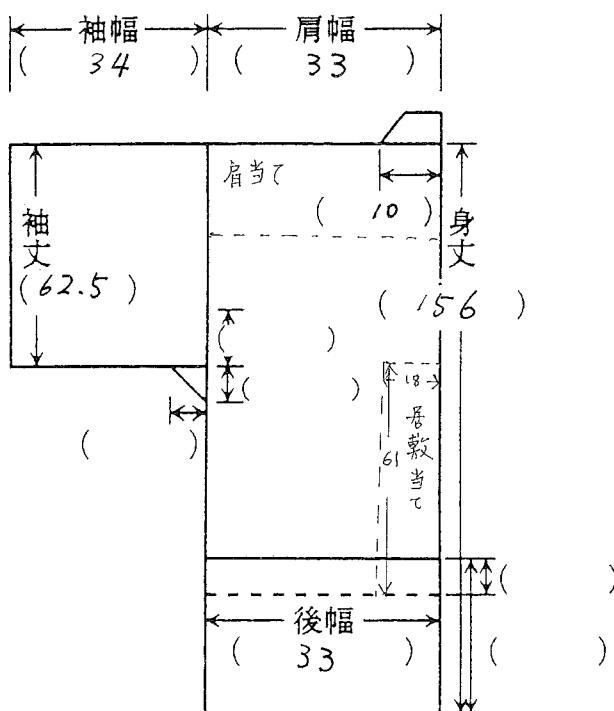
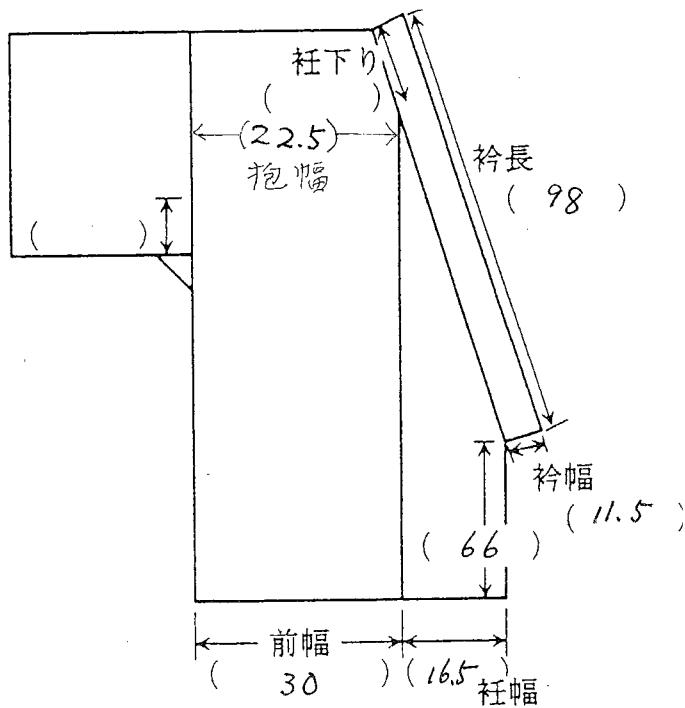


図1 調査カード（ミリクの着物）

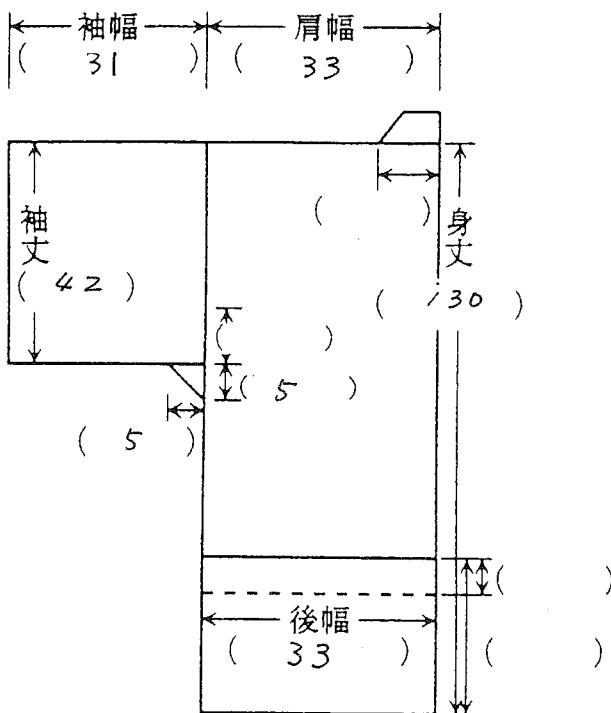
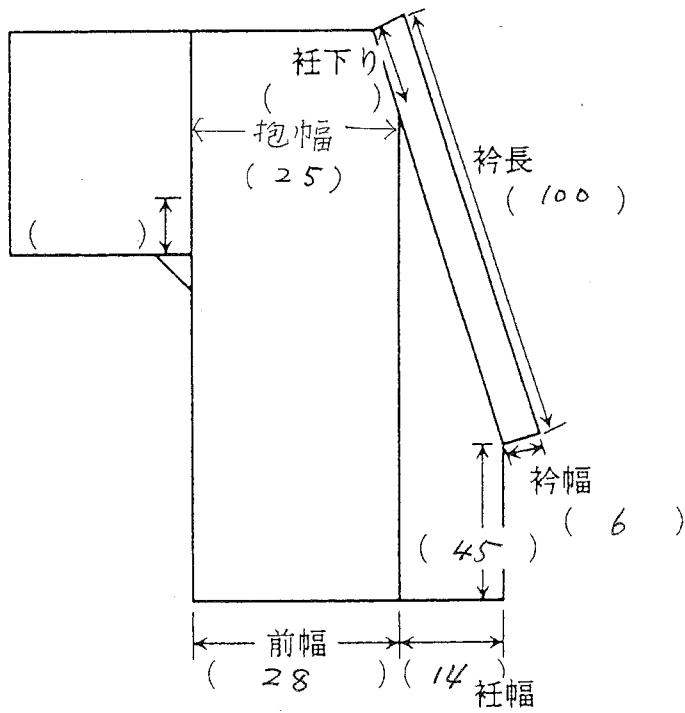


図2 調査カード (タナシ)

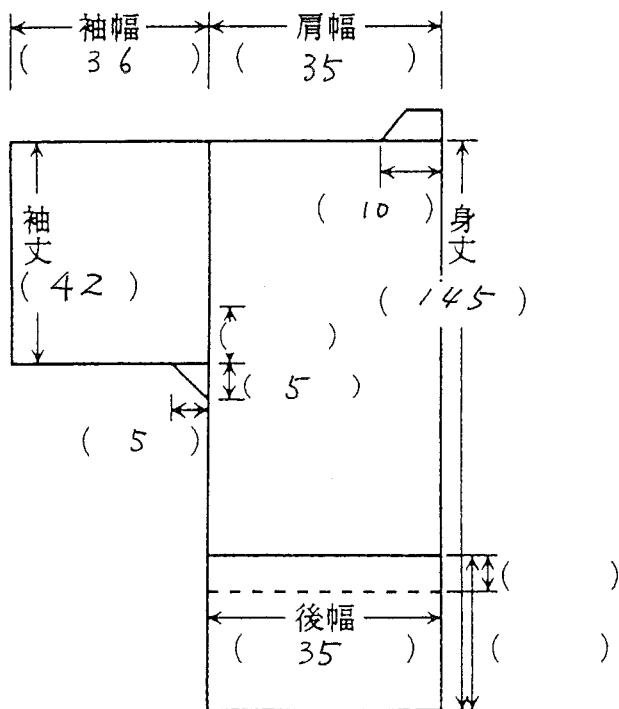
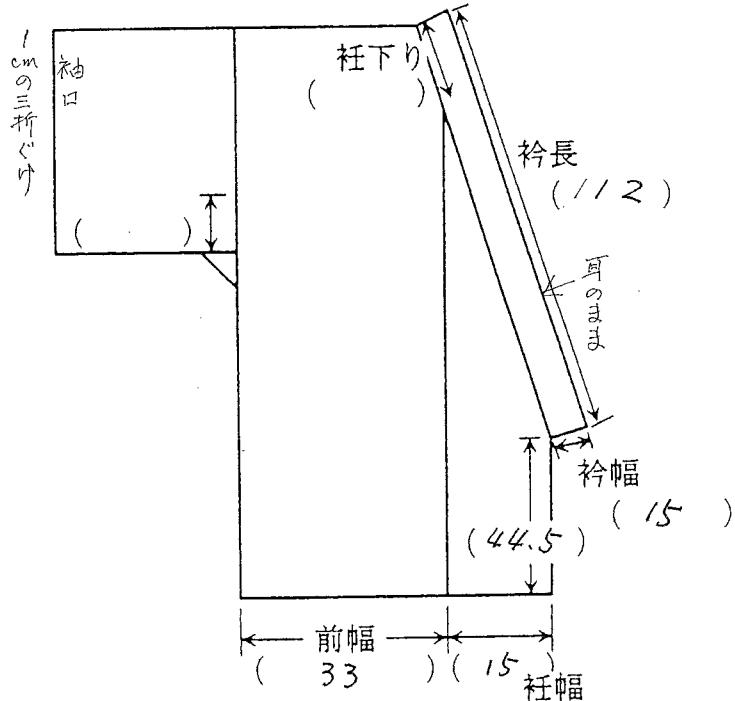


図3 調査カード (クルチヨー)